

4. 生徒の実態

(1) 体格

年度当初の身体測定とともに、以下のような測定を行なった。

身体測定・・・身長 体重 胸囲 座高

体脂肪率

ヒース・カーター法による体型分類法

ローレル指数

他の学校の協力が得られ、資料提供を受けたもの

県立A高等学校・・・身長 体重

国公立小・中学校・・・ローレル指数

本校の測定の記録、協力学校の記録を合わせ比較・検討した結果、本校の生徒には、次のような特徴があることが分かった。

・身長・体重の数値から見ると大きく劣っている生徒のほうが多い。
・身長・体重の関係から見て肥満傾向にある生徒が、他校に比べてかなり多い。

・身長・体重に比べ全体重の中の脂肪の占める割合が多い。

・身長に比べ、四肢の骨の成長はほぼ異常がない。

・身長に対して、下腿の筋肉は、ほぼバランスがとれているが、上肢の筋肉は大きく劣っているなどであった。

高等部の大學生は、骨の発達では余り劣っていない。しかし、筋肉の付着部では大學生は、骨の発達では余り劣っていない。特に歩く・走るなど日常生活に多く含まれる筋肉は、ほとんど劣っていないのに対して、身長・体重などが健常な方では動きのもどどなる下腿は、ほとんど劣っている。ただしそれでも身長・体重などは、上肢は、著しく劣っていると考えられるという生徒も數名はいた。

(2) 運動能力・体力診断テスト

年度当初の測定・記録を基に一般協力校との比較検討を行なった。

運動能力テスト..... 50m走 立ち幅跳び ボール投げ 斜め懸垂
持久走 (男子1500m 女子1000m)

体力診断テスト..... 垂直とび 握力 立位体前屈 肺活量
伏が上体そらし 反復横跳び 踏み台昇降

他の学校の協力が得られ、資料提供を受けたもの

県立A高等学校..... スポーツテスト (50m走 持久走 ボール投げ)

本校の測定の記録、協力学校の記録を合わせ比較・検討した結果、本校の生徒には、次のような特徴があることが分かった。

・50m走・持久走では、A高校に比べ記録的に大きくかけ離れてしまっている生徒はさほど多くない。本校内での記録の個人差は大きくなっている。ボーラー投げでは全体的に低い。本校内での記録の個人差は大きくなっている。背筋力0kg・肺活量900ccなど考えられないような記録となっている部分が少なくない。

以上(1)(2)から次のようにまとめられる。

・身体の発達そのものに障害のある生徒は少ない。

・身長そのものはほとんど劣っておらずまた身長に対して、四肢の発達もさほど劣っていないことが明らかになった。

・日常十分に使っていない部分の生徒自身の力が發揮できていない。測定記録が明らかに低く、もっと高い記録を出す力を持っているといえる数値しかでなかった。

・肥満の傾向を持つ生徒が著しく多い。
ローレル指数・体脂肪率で肥満傾向の生徒が全体の半数を占めた。
また、体型分類では、ほとんどの生徒が、脂肪太りの傾向にあった。

(3) 家庭生活に関する保護者の意識調査
 本校生徒の家庭生活の実態ならびに保護者の意識調査
 研究を進めていくうえで参考にしたいらしくしてみたいと下月にかけて実施した。
 記の要領で実施した。

- ・実施期間 昭和63年6月から7月
- ・対象 本校保護者ならびに協力校の保護者全員
- 山口大学教育学部附属養護学校
高知大学教育学部附属養護学校
神戸大学教育学部附属養護学校
鳥取大学教育学部附属小学校
- 協力校
下山媛和歌山大学教育学部附属中学校
鳥取大学教育学部附属中学校

・方法 生徒持ち帰りによって行なう質問紙法による調査

※集計結果 資料参照

考 察

- ・自分の子供の身長は知っているが、体重は知らない保護者が小学校を除いて多い。本校は、他県の養護学校と比較しても体重を知っている保護者が少ないと
- ・養護学校の保護者は、自分の子供を見て太っていると思っている比率が高い。それにもかかわらず、おやつを食べさせている家庭が多い。
- ・また、耳垢のない子が小中学校と比べて多い。
- ・衛生面では、中学校の保護者になると子供に任せているという比率が高く、養護学校や小学校では、保護者が気を付けている傾向にある。
- ・しかし、本校では、耳垢に対する意識が低い。
- ・就寝時間や睡眠時間を比較すると、養護学校の生徒は小学生に近く、睡眠に関しては、家庭での配慮がなされていると思われる。
- ・帰宅時間は、小学生よりもどちらかといえば早い傾向にあり、家庭で過ごす時間が長いといえる。やはり、家庭と連携した指導が重要になると思われる。
- ・家庭で、テレビを見ている比率は全体的に高い。視聴時間まで比較すると、本校の生徒は、他の養護学校の生徒と比べてもテレビを見ている時間が長い。
- ・養護学校では、家の手伝いをしたり音楽を聴いたりしている子が小中学校と比べて多い。音楽好きの生徒が多いことがうかがえる。さらにお手伝いを通して、労働の喜びや大切さを身につけさせたり、家族の一員としての自覚を身につけさせたりといった保護者の配慮が分かる。

5. 取り組みの概要

(1) 研究仮説

高等部の生徒は身体的な障害はかなり少ない。また、運動機能そのものも大きく劣っていないように感じられる。しかし、運動能力はかなり低いレベルにあり、また、動き一つ一つを見るとどこかぎこちなく、動きそのものが幼稚である。

このことについては次のように仮説を立てた。
 「本校高等部の生徒は、身体活動経験が乏しく多様かつ内容の濃い運動経験不足などから運動能力の成熟が遅れてしまっているのではないか」
 「生徒に運動経験を積み重ねさせていけば、運動感覚経験を多く持たせることができ、運動能力の成熟を図ることができるのではないか。」
 と考えた。

そして、単に学校で運動経験を積み重ねるだけでなく、学校を離れた後も運動を続けていく力をつけることで運動経験の場が拡大でき、将来にわたって生徒の持つ能力を生かしていくようになるのではないかと考えた。このようなくることで、運動能力の向上などを図ることができるのでないかと考えた。このや効果への意欲の向上などを図ることができるのでないかと考えた。そして、その指導仮説を次のように考えた。